



▶赤い色に変われ

▶入れ替わりつちやつた

▶ひもがつかまるよ



▲誕生日会の主役たち



▶新聞に水を入れるよ



▶口のコーンパイ



▶ソウダマ模造品



▲アンケートには「楽しかった」がいっぱい

▶ステッキが浮いた

介護福祉士、介護支援専門員という忙しい仕事をしながら、比留間健一さんは地域の保育園・学校や福祉施設を訪問して、工夫を凝らしたマジックの誕生日会に、マジックマンが招かれました。いよいよ楽しいショーの開幕です。紫のタキシードに金色の襟ネクタイ。長身のマジックマンがさっそうと登場しました。軽快な音楽に合わせて、絵本の絵が消えてしまったり、白いステッキが赤に変わったり、コップが急にピンに化けたりします。

なかでも、子どもたちが大喜びしたのは、このマジックです。「折られた新聞紙に水を入れ、折った新聞紙に水を注ぎます。これをコップに移してみようか。あつ、牛乳に変わっちゃった。飲んでみるよ。わあ、吐き出したくなかった」。

何とこのマジックで、マジックマンの口から、白いテープが次から次へと出てきて、床がテープだらけになりました。

老人施設に勤めていた比留間さんがマジックを始めたのは、ちょっとしたアイデアがきっかけでした。「施設では、毎日レクリエーショ



■マジックマン 比留間健一さん(51歳)小田原市 楽しいサプライズを届けます

ンの時間があり、カラオケやクイズ、紙芝居などが行われていました。しかし、どうも出し物が代わり映えしませんでした。そこで、マジックの道具を買ってきて何回か練習して披露したのです。これで自信ができました。」

平成16年には職場の仲間とマジックのグループを作り、施設以外にも活躍の場を広げるようになりました。

現在、比留間さんは一人で活動していますが、感激したこんな場面があったそうです。

「少し認知症が出てきて、いつもは全く喋らない人が、マジックを見て何度も声を出して笑ったのです。付き添っていた職員が驚いていました。自分が楽しんで演じれば、見る人に必ず伝わるんですね。」

小学校1年生がくれた、お礼の手紙を紹介しましょう。

「はくはストローのマジックをしました。おかあさんが、「おどろいたあ」といいました。またがっこうにきてください。」

比留間さんは、毎週土曜日の朝、ラジオで1時間の番組を担当しています。楽しいマジックの話や交えながら、健康や福祉に関する地域の話をお届けしています。

■入間市4日クラブ
明日の農業を担う若い力

「緑豊かな入間市の新鮮な野菜は、いかがですか。」
赤坂で開催されている産直八百屋「東京マルシェ」に出店して、お客さんに呼びかけているのは「入間市4日クラブ」の皆さんです。

「全国ブランドの狭山茶だけでなく、品質がいいと評判の里芋やこぼろを、日本料理店やレストランでもっと取り入れてくれることを期待しています。入間市の知名度を上げるために、東京へ乗り出しました」と会長の嶋龍太郎さんは話します。

4日クラブの会員は現在15人。7人が製茶業、その他は野菜や大豆、小麦、養鶏農家などです。企業に何年か勤めてから家業を継いだ人、結婚を機に農業を始めた人など会員の経歴は様々です。また、開発途上国の農業援助に参加している会員もいます。2年前からカンボジアでオクラ栽培の指導をしている加藤さんは「入間市での大豆栽培の技術を生かし、カンボジアの特産物にしたい」と意気込みを語ってくれました。

今後の入間市の農業についての場さんはこう話します。「私たちが作る農作物のニーズには限りがあります。手軽なペットボトルのお茶を飲む人が増えて、お茶を淹れることが減っ

ているのもその例の一つです。本当は急須で淹れるお茶が一番おいしいんですけどね。そんな中で入間市の農業をより発展させていくためには、入間市の農産物で、その素材の良さを活かした加工品を開発することも必要だと考えています。」

4日クラブは東京家政大学と連携し、すでに新しい加工品の開発に着手しています。入間市4日クラブの名前が付いた商品を見かけられるようになる日も、そう遠くないかもしれませぬ。



▲盛況だった農業まつり



▲沢山売れるといいな

4日クラブ
入間市の産物、専業農家の青年に、新しい農業経営や販売技術を広げようとするために、本島で産地直営の「産直八百屋」に参入し、農産物の直接販売を目指して日本全国に展開する。入間市でも、この取り組みに賛同して全国に展開している。クラブの名称は、「里・手・心・産直」という英語の頭文字を取ってつけられた。

●第19回いるま生涯学習フェスティバル
何かにはまる冬2013 テーマ 学びの見本市

何かにはまるきっかけをさがしに来てみませんか?
沢山のまなびを“見て、体験して、持ち帰る”。皆さんのご来場をお待ちしています!

日時: 平成25年12月1日(日)
午前9時45分~午後3時45分
場所: 入間市産業文化センター・児童センター 他
主催: 入間市・入間市教育委員会・(公財)入間市振興公社
入間市生涯学習をすすめる市民の会
主幹: 第19回いるま生涯学習フェスティバル実行委員会



- 緑いっぱい、この大自然の中で、美しく、日々の活動ができることに、幸せを感じておられます。(田)
- 今年の夏は暑かった。家の近くのひまわりの花のほとんどが枯れてしまいましたが、しかし、わずかに残った小さい花が頑張ってうねと頑張ってくれました。(田)
- こんなに各分野で輝いている人たちがいるなんて! 我が入間市を誇りにと見直してしまいました。これからもっと期待大です。(田)
- 一人暮らしの引きこもり男性高齢者が年々増えていると聞き、自由で楽しい生涯学習活動に生きるテーマと喜びを感じていただけたらと思います。(田)
- 買物や電車、バスの支払いがカードでできるのが、生活の中で計算しなくていい。暗算で頭を働かせよう、例題で現金を良く使います。(田)

企画編集: 「かがやく」編集委員会
発行: 入間市教育委員会生涯学習課
お問い合わせ 入間市教育委員会生涯学習課
事務局 〒358-8511 入間市豊岡 1-16-1
TEL 04-2964-1111(内線4123) FAX 04-2964-4841

「ごみひろい隊は、人間市環境まちづくり会議のちびくろ会議の中みんなのごみ部会が発端となりスタートしました。「街をきれいにしましょう」と口で言うのは簡単。言っているだけでなく実際に率先して行動を起こさなければならぬ。手にはごみをつまむためのトンダ。一歩、二歩歩くだけで、たばこの吸い殻が目につきまます。植込みの中に隠された空き缶やペットボトル、「ごみを捨てるな」と書かれた立て看板の下には大量のごみ。マナーの悪さが目立ちます。



▲拾ったごみはみんなまで分別します



▲あ！ごみ拾い隊の出発だ！
▲今日も多量のごみ

「ごみひろい隊は、人間市環境まちづくり会議の中みんなのごみ部会が発端となりスタートしました。「街をきれいにしましょう」と口で言うのは簡単。言っているだけでなく実際に率先して行動を起こさなければならぬ。手にはごみをつまむためのトンダ。一歩、二歩歩くだけで、たばこの吸い殻が目につきまます。植込みの中に隠された空き缶やペットボトル、「ごみを捨てるな」と書かれた立て看板の下には大量のごみ。マナーの悪さが目立ちます。

日曜の朝、おそろいのユニフォームに身を包み、人間市駅、武蔵藤沢駅周辺でごみ拾いを行っている人たちを見たことがありますか？
毎月第2日曜日に開催されるごみ拾い。これを行っているのが隊長の本多進さん率いる「ごみひろい隊」皆さんです。

「拾っても拾ってもなくならないごみ。ごみが落ちてくると、ポイ捨てに対する罪悪感が薄くなる気持ちもわかります。あきらめないで、このまからごみが無くなるまで拾い続けようと思います。ごみ一つ落ちていない街を目指して、ピンクのジャンパーのごみひろい隊は今日もあなたの地域で活躍しています。

人間市環境まちづくり会議「ごみひろい隊」みーつけた！街を目指して

美しい人間市を



加治丘陵を見守る会代表 あくなき向学心に燃えて…

福地朝男さん(70歳)が代表を務める「加治丘陵を見守る会」の発足は3年前の4月。メンバーは加治丘陵のウォーキングや自然観察会等で知り合った元気で植物の好きな5人です。会は昨年度、市民提案型協働事業の採択を受け、市の委託により、1年をかけて加治丘陵地内の植生調査を行いました。目的は自然環境の保護保全の管理作業に資するため。実地調査では、加治丘陵を背負った山登りの出で立ちで、ノートとルーペ、水筒と弁当、それに図鑑やカメラ等を抱えながら、時には藪の中へ割って入ったりもします。途中、山林の中で植物に囲まれて弁当を食べながらの会議、というよりも、自然と相談しながらの勉強会。みんなで共有して情報収集する喜びの楽しさを味わっています」と福地さん。

「歩いて、観て、読んで…。植物研究は奥深く無限の広がりがあります。植物はものを言わない、植生調査に終わりはありません。大事なことは継続すること、アートを積み上げていくことではないでしょうか。」
福地さんの向学心に限りはありません。第2の人生を植物研究に捧げ、植物をこよなく愛する仲間と共に加治丘陵を見守る姿に感動を覚えます。



▲木を観て森を観る 森を観て木を観る
▲時には新しい発見を求めて



▲サロン山ちゃん家
▲楽しいわしゃべりタイム
▲ハーモニカに合わせて楽しく歌う

静かな住宅街の一角から、にぎやかな笑い声が聞こえてきます。今日は、ふれあいいきいきサロン「山ちゃん家」の開催日です。「何か地域の役に立ちたい」との想いが強かった奥様の気持に込めようとして、山口宏さん(78歳)が自宅を開放してサロンをオープンしたのは昨年の9月のことでした。以前妻が自宅に近所の人をお呼びしてはお茶飲み話をしていました。それを土台に、地区の方がおしゃべりをしながら交流できる場所ができないか。そんな風に思ったのがきっかけです」と山口さん。

「難しい言葉や解りやすい言葉に置き換えることなどに気を配っています。そのため日頃の勉強が欠かすことができません。しかし、お手伝いした方の役に立つことができたとき、苦労した甲斐があったと満足感を覚えます」と櫻井さん。
8月に行われた「はじめてみよう夏ポランティア体験」では、要約筆記の体験に6人の方が参加しました。6人はサークル会員の指導を受け、熱心には要約筆記の体験に挑んでいました。
グリーンペンでは通院に同行するなどし、ボランティアとして耳の不自由な方のお役に立ちたい、と話していました。



ふれあいいきいきサロン「山ちゃん家」みんなが集まる憩いの場

みんなが集まる憩いの場

皆さん「要約筆記」という言葉をご存知ですか？聴覚に障がいがある方に情報を伝達する手段の一つで、会話の内容を文字にして伝える筆記通訳のことです。
「手書きでは聞いた話を全て書き写すことはできません。正確に、早く、読みやすくをモットーに話しの言葉を簡潔かつ忠実に伝えることが大事です」と話すのは人間市要約筆記サークル「グリーンペン」の代表、櫻井嘉美江さんです。
8月の人間市福祉大会では、要約筆記者の資格を持つ4人の会員が、長時間にわたり要約筆記を行いました。近年、市内で行われる様々なイベントでも、手話通訳者とともに要約筆記者の姿を見かけるようになってきています。



▲活躍する要約筆記者
▲要約筆記体験